

感動を創造するしくみとは

—しかけづくりと仮説・数値化・検証—

開倫塾

塾長 林 明夫

林：おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。

先週はオリックス元専務の廣瀬駒雄さんから、「イチロー選手はなぜ素晴らしい打者になったのか・失敗から学ぶ」というお話をお伺いしました。

今日もまた、ゲストの方をお招きしています。感動創造研究所の古橋和好さんです。古橋さんも、先週おいでいただいた廣瀬さんと同様に公益社団法人経済同友会の会員としていつもご一緒させていただき、年に何回も学校への出張授業に一緒に行かせていただいております。また、東京キワニスクラブでもご一緒させていただいている私の尊敬する友人です。

古橋さん、今日はよろしくお願いたします。

古橋：おはようございます。

林：さっそくですが、まずは、古橋さんがご所属の感動創造研究所についてまずお話をお伺いしたく思います。感動を創造するとはどのようなことでしょうか。

古橋：テーマが大変広くて、深くて、重いですけれども、これは私の個人的な経験にかなり依拠するところがあるのです。実は、私は現在の三井住友銀行に約30年間勤務いたしました。あちこちに転勤の人生で、30年間のうちに13回転勤をし、転居は7回という人生を送り、そのあとに銀行の取引先であります株式会社ムラヤマ、今年でちょうど110年の歴史のある会社でございますが、ここに入りました。

林：ムラヤマさんというのは、大喪の礼を行ったり、ものすごく大きなイベントを行ったりする会社であるとお聞きしていますが…。

古橋：皇室、あるいはナショナルイベントですね。大きなものではそのようなところにも関わらせていただいておりますが、取引先の関係で銀行からそこに行きました。銀行とは全く違う世界でしたね。銀行は言ってみれば数字が最優先される世界ですけれども、株式会社ムラヤマは全くリアリティそのものの空間の創造をする・クリエーションをするという会社であります。社歴はちょうど110年で、明治35年に日露戦争で日本の兵隊さんがロシアに勝ち、そのときに戦勝のアーチをつくったという記録があります。要は、人が集まって喜怒哀楽を伴にする空間を作る会社です。

林：人が集まって喜怒哀楽の空間をつくる、よく考えればムラヤマさんはそのような会社ですよ。
古橋：はい。そこで 13 年間、会社の経営を中心とする職務を遂行してきましたのですが、昨年退任しました。ムラヤマがちょうど 100 年を迎えた 2002 年に「これからの 100 年をどのように考えるか」ということが出て、そのときに、これからは感動というテーマをもっと広めて深めていくことが必要だろうということになりましたので、今度はそこからスタートしました。

林：それが感動創造研究所ですね。素晴らしいですね。

古橋：大層な名前になっておりますが、人間が生きていく中でもものの価値は大変重要なことですし、日本もものの価値を拡大化するために経済成長をしてきたという側面がありますけれども、一方で心の価値はもうひとつ忘れ去られたようなところがあります。

林：ものの価値と同時に心の価値も大事だということでしょうか。

古橋：有形価値と無形価値ですね。形は無くとも価値はあるのだろうということが、我々が今考えているテーマです。ちょうど今、ブータンから若き国王ご夫妻がいらっしゃっていますが、ブータンは世界で一番幸福度の高い国だと言われています。

林：国民幸福度、グロス・ナショナル・ハピネスですね。

古橋：GDP と GDH です。この Happiness (パヒネス) という言葉と感動とはかなりオーバーラップする
というように考えております。

いずれにせよ、ものの価値、ものの効用を大事にしながら、心の価値あるいは人と人が触れ合う交流の場所をしっかりと感じ取っていく世の中、そのような価値が大いにあるのだということを知っていただく、または自らもそこに飛び込んでいってそれを大いに感じていただく、感動創造研究所ではこのようなことをやっております。

林：そうですか。ところで、東日本大震災に際してもいろいろな活動をなさったとお聞きしています。

古橋：はい。感動創造研究所が震災に際して行ったことは、子どもさん向けの絵本カーニバルです。絵本を持って行き、子どもさんのライブラリー(図書館)をつくって絵本を読んでもらったり、本の読めない幼児の方には社員が読み聞かせを行ったりするボランティアをいたしました。

心がひどく萎えている子どもたちを、絵本によって元気づけることができたかなあと、現場を見て大変嬉しく思った記憶があります。

林：そうですか。最後にお聞きしたいのは、感動を創造するために一番大切なことは何かということ
です。

古橋：感動を創造するのに大切な 1 つは、人と人との交流だろうと思います。いろいろな感動の交流の中で楽しむ仕方がありますが、それは二次的な話であって、やはり人と人とお互いの人格を認め合いながら真正面から触れ合うことが一番であると思います。

林：人と人とお互いに人格を認め合いながら触れ合う、それが原点だということですね。2 つ目は何ですか。

古橋：2 つ目は、触れ合うのが増幅するような2 次的な仕掛けをすることでしょうかね。

林：仕掛けとは、例えばどのようなことですか。

古橋：五感に訴える照明であるとか音楽であるとか匂いであるとか、そういうものを最大限に活かせる状況をつくっていくことであると思います。

林：照明や音楽や匂い、これらはとても大事ですよ。日本人は、それらの状況をつくることは得意ですか。

古橋：得意だと思います。私の夢は、感動を数値化することです。

林：そうすると、仮説を立てたものが検証できますね。

古橋：とりあえず、仮説を立てたいなと思っています。

林：立てた仮説を検証するには、やはり数値化が必要ですよね。

古橋：今は、大学と一緒にそのあたりの研究をしている最中で、仮説を立てるレベル、数値化するレベルまでにはなかなかいっておりません。しかし、それが完全にできてしまうと、人間味はおもしろくなくなってしまうこともありますから、その功罪は両面あると思います。

林：そうですか。よくわかりました。

今日は、特別ゲストとして感動創造研究所の古橋和好さんをお招きして、お話をお伺いしました。感動を創造するとはどういうことか。一番大切なのは人と人とお互いを認め合う場をつくることだという内容のお話をお伺いしました。

今日は、どうもありがとうございました。

古橋：こちらこそ、ありがとうございました。

— 2013 年 2 月 23 日追記・改訂 林明夫—